敎草

端本

XB10
299

東京大学総合図書館

第一 稲米
第二 糖製 (欠)
第三 養蚕 (欠)
第四 生糸
第五 樟虫
第六 野蚕
第七 葛布
第八 苧麻 (欠)
第九 草綿 (欠)
第十 織緯草木 (欠)
第十一 索麪
第十二 葛粉
第十三 藍
第十四 青花紙
第十五 製茶
第十六 烟草
第十七 漆
第十八 蒔繪
第十九 蠟
第廿 白栁
第廿一 疉表
第廿二 香蕈
第廿三 製紙 (欠)
第廿四 蜂蜜
第廿五 油
第廿六 臙脂
第廿七 澱粉上 (欠)
第廿八 澱粉下 (欠)
第廿九 褐腐
第卅 豆腐

0007952245 X310-299

博物館藏版

教草 第一

稻米一覽

凡そ日用に供する衣食の如きは人皆之を衣とし之を食しく何たるを知らさるところそれ其物品を改正良善にするの術に暗く従て新規の發明なく國産を繁殖せしめ且各其業に就く事を知らす故に父兄たる者其子弟をして幼時より各業の大略を知らしむることあらは他日脩産の基となるへし嚮に明治六年澳國博覽會出品の際に乗し各種職業の教草を編成せしめ画図を加へ以て童蒙に便せり然に舊版第一より第廿四まて昨八年七月の火災に罹りたり今之を再刻し兼て従前の謬誤を正し遺漏を補ふしむと雖も其図の舊版を再刻する者の如きは鮮明ならさるあり看者之を恕せよ且我國産の多き此一部の盡せる所に非す此餘の如きは以て他日に譲る

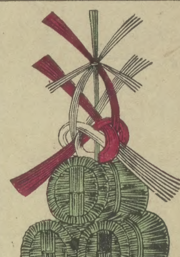
明治九年二月　田中芳男記

第一　稲米　第二　糖製　第三　養蚕　第四　生糸　第五　樟虫
第六　野蚕　第七　葛布　第八　苧麻　第九　草綿　第十　織緯草木
第十一　索麪　第十二　葛粉　第十三　藍　第十四　青花紙　第十五　製茶
第十六　烟草　第十七　漆　第十八　蒔繪　第十九　蠟　第廿　白拗
第廿一　疊表　第廿二　香蕈　第廿三　製紙　第廿四　蜂蜜　第廿五　油
第廿六　臙脂　第廿七　澱粉上　第廿八　澱粉下　第廿九　褐肉　第卅　豆腐

版權所有

教草第壹

稲米一覧



夫稲ハ粳米糯米の総称にして田に在て茂生する物を稲といひ粃稃を脱せざるを籾といひ稃粃を除くを米と云而其稲に旱潦のかはり早中晩の別あり其早稲ハ陸田に植ゑ稲ハ水田に栽ゆ其早稲ハ粒微小く味薄しと雖亦夏月諸穀の絶ざるを續て利用を為せり中晩の二稲ハ收季微遅しと雖粒大にして味美なり糯米とすべき中晩を以て勝れりとす而稲を作るの眼的ハ其粒子を求むるにあらざれば又其品の善良にして多からん事を欲する物なれバ土地の肥瘠季候の寒暖を注意し其地に應ずる種子を撰びて之を求むべきなり

稲の種類極て多く其稱呼も亦従て繁し大抵其人其地に由て名づくる物あり其一二を列すれバ　茶ウリガシ小粒にして稈細く其色茶褐色なり　三度バケ始赤く末に至て白し　天草モチ籾色赤く米黒し餅にして極上品なり　ヒトフシワセ芒稃共黒色なり莖一節を生ずれバ實成て國所に依て再收すと云　ヤハタ芒なくして稈頗長し　コミノ芒短くして粒大に稈長し　ムラサキナヘ莖葉芒稃共に紫色にして米に為バ色白し一種秈米と云ハ赤白二種ありて堅脆にして味薄く饑易し且搗擣て米と為に非ざれバ煮熟しがたく米ならず又二度イ子ハ早春苗代に播て六月刈とり再び種え初冬に得る之を土州にてトヤロクと云日州すハ一度刈采ると稲孫より再び米を得ると云

種浸ハ早中晩とも其地の寒暖に由と雖大抵節分より廿日を始め八十八夜前後に至るを度とし種子ハ一畝に凡五合の積にして先種子を俵に裹み池沼又ハ井川に浸と約十日乃至廿餘日其後水より取出し微温湯を此の俵の上より灌ぎ蓆を掩ひ芽を出さす又水に漬ける種子を取あげ開放し二三日乾し上下手返し黄昏前に取收め上下より蓆を掩ひモヤシの二分程出るを待て播なり　又俵のまゝ天日に干し夜ハ屋内にて蓆に裹み萌芽せしむるあり　又水に漬ける種子を泥氣のなくなるまで洗去り二三日干し蓆を掩ふあり或ハ水より取出せる侭にて種子の眼少し揃ふを窺ひ直に苗代に撒布する所あり総て此を芽秧と云

苗代ハ一區内にて最肥良にして用水の灌泄に自在なる土地を擇して秋末より牛馬にて耕き糞苴を調和し置き早春に至り二番打のとき鍬にて土塊をくだき耙勞し一ト打ごとに豆粉或ハ篠の葉青草其外干鰯油糟の類を入れ又濃糞を灌でよく混和し用水を入れ畦の四隅を塗り雜草を生ぜしめず而平均板にて其地を均し高低なからしめ用水清く泥氣の沈むる後彼の芽秧を午時後撒布すべし之を稀稠なく撒とハ手練の上なれでハ整がたきとなり　芽秧を蒔し後晴天にハ苗代の水を悉く泄し日光に照し温氣の徹する事を要す故に毎日朝より夕まで水を干し夕より翌日朝まで灌ぎ置くべし但其水二三寸より深くすべからず若雨下んとする時ハ十分水を湛き小苗をして根を潑出せしむることなかれ　新苗既に發生しなる後干鰯或ハ油糟等を撒布し其生長を促し繁茂せしむる事を要すべし

旧田を始て耕を荒打と云大抵立春前後を以て初耕とす其後二月の末までに二番三番打を為し耗を曬らし或ハ澆糞を用る故すべく把治を細にし土塊を解へしめまて麥菜種両作の田ハ刈跡を深く耕し土塊少しもなきまで牛馬を以て両三度耕耙し糞苴を澆合しく日の炎氣に照し其後用水を澆き再び土塊なきまで縦横斜角に一両度耙耨し然後秧を挿となり

種子を播て新秧の一二寸なるを筒苗といひ三四寸生ずるを玉苗といふ其苗代に播てより九四十五六日乃至五十五六日を經て分栽の期とす之を田に移すハ多く農家の婦女及び娘子にて笠を並べ袖をつらね田歌うたひつゝ栽る之を早乙女と云ふ此婦女子の土宜に應じ二三本或ハ四五本を一科とし科毎に間を一二尺程づゝ疏て条々斜まず碁枰の如くなるも丁寧に且速に栽るなし又上田ハ疏く下田ハ密に分栽するなれ地理に練熟せるものゝ業なり　栽終りて後田の四境を繞り細に苗の不足を察し或ハ苗の顚倒横斜をよく補整すべし其苗を挿に疏密ありと雖一段の田三百歩に苗一万四五千より乃至二万科を以て中分とす　分栽すなる後雁爪小鍬或ハ鐵鉋にて根元の泥土を碎き凝固せしめず始めハ右より其次ハ左り其次ハ立と縦横に六七日を經或ハ十日程毎に穿ち或ハ手にて土を動し終りに田を栽る如く前より次第に後へ足を引て足跡をよくうちあらしおくなり　數回如是なれバ目に見えざる草根までも取除て苗根の周圍を攪回し其泥土を動すを以て稲株の鬚根其勢を得て十分に延蔓しよく繁茂する穂もよく出そろひ花も代謝して田面既に稲黄色を呈ずるに用水を悉く泄し其田を日光に曝し稲根を乾すべし根の土堅くなる程乾すときハ其米必堅實なり

陸稲すも早晩の種類ありて形状全く水稲に異るなし此を播ハ二三月の間沙土或ハ畑に馬牛糞すく澆糞を和しよく耕し種子を一畝一升の積にて麥粟を播ごとく鍬にて畦溝をさらへて一掬づゝ撒て後土を掩ふあり又種子を水に浸こと三日にして天日に乾し甲少く拆かるゝと見て灰糞に混ぜ一畦ごとに稀稠なくまきて土を掩ふなり

さて苗代の頃より始て秋熟の末まで屢鳥獣の来て窺ふをおそれ田場に縄を張り串を立鳴子を撃き或ハ稈偶を設て之を驚しまた山村にてハ竹筒八九寸なる物を以て節の上に小串を貫き左右の柱に通じ昂低する機を製し澗流を受しむ水盈の筒に満るまで翻々響を發しよく鳥獣をおどろかすなり

秋熟したる稲を鎌を以て刈とり稈に束ね五日程天日に干し或ハ竹竿に倒架しおき又直に田舎に持運び抱把に掛け諸手すくるまおとし穀篩すくふるひかけ日干し颺扇の上戸に入れ羽輪を轉回すれバ穀と粃と左右の口より分離し塵埃ハ他の一方より飛散す之を姥或ハ猫伏の上に箕すく秤りかけ日干し又前に穀篩すく撰分ける不正の穀とホドロを連枷すくまくうちき再び箕すくひぐし前の如く颺扇すて精粗を區別しするるものを礱或ハ木臼すて搗立再三颺扇すて穀糠を開放し其後千斛或ハ万斛篩すくよく淘汰すれバ精米ハ外に粗米ハ金籠の内に留る是を枡すく量り俵に收め貯ふ

又苗代に播餘したる芽秧の稃糟を去り炒過して臼すく舂き扁米と為すものをヤキゴメと云勢州荘野駅すて前年の青稈貯おきて俵子を造り之を裹て水引すく其上を飾り是と四方に送る

今爰に擧るものハ岐阜縣下池田郡萩原村松原樹太郎不破郡赤坂村矢橋宗太郎白川縣下飽田郡山室村三重縣下朝明郡中野村天春九十郎神奈川縣下馬場村洋野久右衛門等の下種の法より獲收の説を參考して其概畧を示すものなり其詳悉なるハ別に編を為すべし

明治六年癸酉三月

丹波修治 述

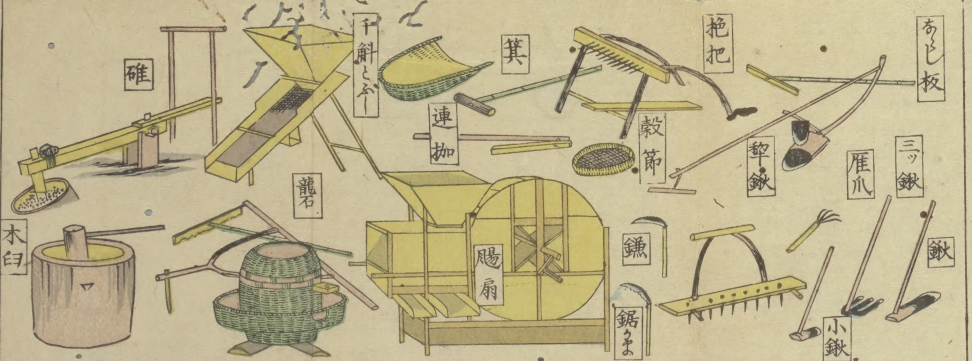
溝口月耕 画

各國産地品位概表

上等	美濃 肥後 伊勢 尾張 遠江 肥前 日向 山城 大和 駿河 伊豆 近江 三河
中等	播摩 丹波 丹後 但馬
下等	上総 下総 武藏 加賀 越後 信濃

各國豊凶産出概表

豊凶	上田一反歩	中田一反歩	下田一反歩
	豊凶	同	同
肥後國山室村	二石四斗五升 一石四斗	一石七斗五升 一石五升	一石四斗 八斗七升
美濃國萩原村印大	二石 一石四斗	一石六斗 九斗	一石二斗 一斗
同國赤坂村印中	二石 一石四斗	一石八斗 一石	一石四斗 五斗
武藏國馬場村	一石七斗 八斗		



博物局
男爵田中芳男 昭和七年
東京帝國大學圖書印
B 65992
東京大学総合図書館